

ジョウゼフ・コンラッドの小説の一特徴 — 主要な作中人物たちの孤独と精神的な弱さ —

One Characteristic of Joseph Conrad's Novels: Main Characters' Loneliness and Mental Weakness

古 賀 元 章

Motoaki KOGA
英語教育講座

(平成25年9月30日受理)

はじめに

イギリスの小説家であるジョウゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) の代表的な作品として, *Almayer's Folly* (1895), *Heart of Darkness* (1899), *Lord Jim* (1900) がある。これらの小説は共通点を有している。それは, 主要な作中人物たちが西洋人として未開社会で生活するが, うまく溶け込むことができないで, 最終的に死を選択することである。そうした人生から浮かび上がるのは, 彼らの孤独と精神的な弱さであるように思われる。このような彼らの姿は, コンラッドの小説の一特徴であると言えよう。

主要な作中人物たちはそれぞれの人生にどのように対応しているのだろうか。その対応に焦点を当てて, 上述したコンラッドの小説の一特徴を検討する。その際, 彼らがコンラッドのどのような作品執筆の意図のもとで描かれているのかを推し量ってみたい。

1

Almayer's Folly の舞台は, ボルネオのパンタイ (Pantai) 河から数十マイルさかのぼったマレー人のサンバー (Sambir) 部落である。¹ 河が密林に覆われた部落と他の社会とを橋渡しする役割をする。この小説の冒頭では, 部落に住むただ一人の白人である主人公のオールメイヤー (Almayer) が目の前を流れるパンタイ河を眺めている。ここで彼が夢見るのは, 富と権力を獲得して, 最愛の娘のニーナ (Nina) と一緒にヨーロッパで暮らすことである。そのため彼は, デイン・マルーラ (Dain Maroola) が帰って来て, 約束した黄金をもたらすのを待っている。“‘KASPAR! Makan!’” (76)² と食事を知らせる耳障りな妻の声が, 彼を優雅な将来の生活についての夢から目の前の現実へと引き戻す。このことは, 夫婦の仲がよくないことを示唆する。

ここで, フラッシュバックの手法が用いられて, 主人公の現状のいきさつが書かれている。20年前, 彼はインドネシア中部のセレベス島のマカッサル (Macassar) で貿易を営むオランダ人のフーディッグ (Hudig) に事務員として雇われ, 倉庫で働いていた。フーディッグのところへ出入りする船長の中に, “‘the Rajah-Laut — the King of the Sea’” (7) と呼ばれるイギリス人のトム・リンガード (Tom Lingard) という船長がいた。倉庫の出納係のヴィンク (Vinck) によれば, 船長は海賊船と闘って勝利し, 敵の船内に取残されていた少女を養女として引き取った。

やがて1年ほど過ぎると, オールメイヤーは工作上, リンガード船長と頻りに付き合うようになった。その結

果として、船長からの申し出により、彼は養女と結婚した。その狙いは、船長の財産を譲り受けると、オランダのアムステルダムの大邸宅で豊かな生活が送れるし、彼女が早死にするかもしれないからであった。

やがて、場面はオールメイヤーの現状に戻る。彼が日没になったので家へ帰ろうとしたとき、従者を伴ったデインが現れる。ところが、オールメイヤーと簡単な言葉を交した後、デインらは対岸に住む酋長のラカンバ（Lakamba）の所を目指して去ってしまう。オールメイヤーはデインの行動に不信を抱きながらも、将来の生活に目途がついたと安堵して眠る。そばにいるニーナは、父親と違って、かすかな望みと不安が入り混じった複雑な気持ちを抱く。

オールメイヤーは、妻や娘から遊離して存在する孤独な夢想家である。それは、他の彼の振舞いからもうかがわれる。その振舞いを再びフラッシュバックの手法が取り入れられている場面に見出してみよう。オールメイヤーは義父のリングード船長がとった行動を思い出す。船長はサンバー部落に、若夫婦が住むための新居とオールメイヤーが仕事をするための倉庫を建てた。この部落での交易はリングード商会が行っていたので、オールメイヤーは、これで人生が開けると期待した。しかし、船長が黄金とダイヤモンドを探すため奥地に探検している最中に、アラビア人の貿易商たちはパンタイ河で交易所を開いて、今まで独占していたリングード商会の仕事を横取りした。それが実現できたのは、オールメイヤーには彼らと商売を競う力量がなかったからである。その上、お金の貸し手であるフーディッグの会社の倒産や船長の度重なる探検のため、商会は資金繰りが苦しくなった。

オールメイヤーの妻は結婚して間もなく、野生的で粗野な性格をむき出しにして、夫やその背後にある西洋文明に対して嫌悪感を示すようになった。そのため、彼が頼りにするのは娘のニーナだけであった。

船長は金鉱の発見に失敗して戻って来たが、すぐに資金を調達するためヨーロッパに向かった。そのとき、彼は孫のニーナと一緒に連れて行き、途中でシンガポールの知人に彼女の教育を依頼した。船長とリングード商会がいない間、オールメイヤーは娘を家に連れ戻す勇気がなかったし、苦しくなったリングード商会の経営を再建する力もなかった。

それから10年が過ぎ、突然ニーナが戻って来た。彼女は、混血児であるため、当地でいじめを受けて追い出されたのであった。船長の財産をあてにできなくなったので、彼は美しくなった娘と一緒にヨーロッパで優雅な生活を送るため自分で金鉱を探し出すことを決め、その資金源の獲得を考えあぐねていた。

ある日、貿易商と偽って、デインという若者（実際には、インドネシアのバリ島に住む酋長の息子）がオールメイヤーの所にやって来た。訪問の狙いは、サンバー部落あたりを支配するオランダ政府の命令で禁止されていた火薬をオールメイヤーの斡旋で手に入れることであった。金鉱の探求の援助を条件にして、彼は来訪者の申し出を引き受けた。ところが、この密輸に関する商談がきっかけとなって、彼の知らない間にデインと娘が恋仲になった。デインは彼に、数日後に戻って来ると約束して去った。

フラッシュバックの手法が再び終わる。場面は、この小説の冒頭でオールメイヤーと若者のデインが再開した後に移る。デインは足早に、対岸に住む酋長のラカンバの家に行く。そこで酋長と会って、彼は事情を話す。火薬を積んだ彼の船がオランダ軍に発見されて、多くの部下たちが死んだ。彼は命からがら逃げてきたので、オランダの士官たちがここまで自分を捕らえに来ることを伝える。彼の話聞いて、酋長の腹心であるババラッチ（Babalatchi）の提案を受け入れ、デインは密林の奥にある入植地に身を隠すことにする。

翌日の朝、パンタイ河の三角州に昨夜の嵐で打ち上げられた丸太と共に一つの死体が流れ着く。その死体は、誰であるかわからなかったが、腕に付けられた指輪からデインだと判断される。それは、オールメイヤーの妻が仕組んだ画策であった。その画策の理由は、娘の恋人がオランダの士官たちから無事に逃れられるためであったし、また、夫の横やりを避けるためでもあった。

母親から事情を知らされ、ニーナは密かにカヌーを漕ぎ出して、恋人がいる密林の入植地を目指す。その夜、奴隷のタミナー（Taminah）が現れて事の真相を告げると、早速オールメイヤーは、二人が潜み隠れ家へ行く。現地では、驚愕した彼と二人（デイン、ニーナ）との間で言葉が交わされる。オールメイヤーが若者に“You thief!” (178) と叫ぶと、相手は、“‘Nay, Tunan,’ ... ‘that is not true also. The girl came of her own will. I have done no more but to show her my love like a man; she heard the cry of my heart, and she came, and the dowry I have given to the woman you call your wife.’” (178) と答える。それを聞いて怒号し、オールメイヤーは娘に、“‘Tell me,’ ... ‘tell me, what have they done to you, your mother and that man? What made you give yourself up to that savage. For he is a savage. Between him and you there is a barrier that nothing can remove....’” (178) と問いつめる。すると、彼女は、“‘I am not of your

race. Between your people and me there is also a barrier that nothing can remove....'” (179) と返事する。

娘の返事は、オールメイヤーが執拗に白人社会へ帰属することを夢想する態度を痛烈に批判した内容である。今回の彼女の行動は、この父親の夢想を完全に打ち砕くことになる。なぜなら、彼の心の支えになっていた娘が自分のもとから去っていくからである。翌日、酋長の命令を受けた男はデインとニーナを二人が目指すバリ島まで護送する。

オールメイヤーの夢想と深くかかわりのある人物たちが次々と彼のもとから去って行った。彼のはかない夢想が完全に破れる。その後、生きる希望のなくなった彼は、アヘンの常習者となり、廃人として孤独のうちに死ぬ。

コンラッドは *Almayer's Folly* に付けた “Author's Note” の中で、“there is a bond between us and that humanity so far away.” (viii) と記した後、次のように書いている。

I am content to sympathize with common mortals, no matter where they live; in houses or in tents, in the street under a fog, or in the forests behind the dark line of dismal mangroves that fringe the vast solitude of the sea. For, their land — like ours — lies under the inscrutable eyes of the Most High. Their heats — like ours — must endure the load of the gifts from Heaven: the curse of facts and the blessing of illusions, the bitterness of our wisdom and the deceptive consolation of our folly. (viii)

彼は、西洋人であれ、遠く離れた東洋の現地人であれ、両者に共通点が存在することを述べる。それは、目の前の現実には耐えなければならない人間の微力である。天から見たら、この微力が、耽溺する幻想、はかない知恵、まやかしの慰めとなる愚行に見られる。そうした人間の特徴を演じるのが、この小説に現れる孤独な夢想家の主人公である。その姿には彼の精神的な弱さも深くかかわっていると言える。

Almayer's Folly にはフラッシュバックの手法が適用されている。この手法は、オールメイヤーの現状を説明するのに有益である (Schwarz 82)。フラッシュバックの手法による過去の描写と現実の描写の手法とを交互に用いて、主人公に関する話の内容を蛇行させる小説の構造は、われわれ読者に、過去から現在へと続く人間一般の特徴の一面（孤独、精神的な弱さ）を認識させようとしたと判断できよう。

Heart of Darkness は、コンラッドが体験したアフリカの奥地の悲劇（西洋人の残忍さや悲惨さ）を伝えている。³ この伝達の役割を演じるのが船乗りのマーロウ (Marlow) である。この小説の冒頭は、彼が4人の友人に船上で自分のアフリカの体験談を披露することから始まる。彼は、海外の航海を終えてロンドンへ戻ってきたが、再び乗船する仕事が見つからなかった。ところが、子供時代から地図が大好きであった彼は、ある店の見た飾り物に魅了される。それは、いつの日か行ってみたいと思っていたアフリカのコンゴ河の地図である。そのため彼は、ヨーロッパ大陸にいる親戚の叔母の計らいで、この河を利用する貿易会社の船長となる。

マーロウが乗った船は、寄港先で税関使と兵隊を上陸させるため、原始的なアフリカの沿岸を航行する。彼が船上から小舟に乗った黒人たちを時折見ると、彼らは大声で叫んだり、歌を歌ったり、汗を流したりする。黒人たちの元気な姿を観察して、彼は “I would feel I belonged still to a world of straightforward facts” (14)⁴ と語り、未開社会に対してまだ落ち着いて接している。しかし、このような彼の気持ちの余裕は長く続かない。次第に海岸や河の流れが死相を感じさせるようになる。船は30日余りを経て河口に到着し、別の船がマーロウらを最初の貿易支所へ運ぶ。彼が上陸して驚いたのは、口では言い表せないほどの無残な自然の光景（草むらに転がっているボイラー、ひっくり返ったトロッコ、動物の死骸のように捨てられた車輪、壊れた機械類、錆びたレールの積み重ね）である。

マーロウは涼を求めてさらに森の中へ進むと、今度は死を待つだけの黒人たちの無残な姿に遭遇する。彼らは、年期契約という合法的な手段により、森の奥地から運び出されている。

コンラッドは、Fisher Unwin 社に宛てた1896年7月22日の手紙の中でコンゴ滞在に触れて、“All the bitterness, of those days, all my puzzled wonder as to the meaning of all I saw — all my indignation at masquerading philanthropy — have been with me again, while I wrote.” (qtd. in Karl 379) と書き綴っている。ベルギーのレポルド2世 (Leopold II, 1835–1909) は、1885年に「コンゴ独立国」(État indépendant du Congo) を築き、文明開化の名のもとにこの地域から象牙、鉱石などの資源を搾取してい

る。その担い手が「ベルギー奥コンゴ貿易振興会社」(Société Anonyme Belge pour le Commerce du Haut-Congo)である。コンラッドは、同国のブルッセルに住む遠縁のマルグリード・ボラドフスカ(Marguerite Pordowska) 未亡人の斡旋でこの会社の船長になり(Baines 110), 1890年6月から同年12月までベルギー領コンゴに滞在してコンゴ河を航海する。1896年の手紙はそのときの航海体験に関する内容である。この手紙に記されている“all my indignation at masquerading philanthropy”は、レポルド2世の残忍な奥地開発に対して憤慨する彼の気持ちが表現されている。その憤慨が、*Heart of Darkness*の未開地の光景に反映されている。

その後、マーロウは貿易会社の中央支所で、本社から一目置かれているクルツ(Kurz)を知る。彼は、他のすべての支所の合計したものよりも多くの象牙を同社の中央支所に送り届けている人物である。彼は、当初、未開社会の文明開化に寄与したいという理想に燃えていたが、未開社会の生活に溶け込むうちに、声量と雄弁により原住民から神のように慕われる。彼の心情は次第にこの生活に慣れ親しみ、文明社会を嫌悪するようになる。しかし、クルツが中央支所に象牙を送り届けることは、彼が文明社会との関係を完全に断ち切っているわけでもないことを物語っている。

マーロウが病魔に襲われたクルツに出会い、彼のことを理解して次のように語る。

No eloquence could have been so withering to one's belief in mankind as his final burst of sincerity. He struggled with himself too. I saw it — I heard it. (68)

クルツは文明社会と未開社会の間で身を引き裂かれて苦しんでいた。内面に巣くうこの苦しみが絶えず彼に付きまとっていたのである。上の語りは、そうした彼の姿を伝えている。

マーロウが“The horror! The horror!”(71)というクルツの末期の言葉を聞く。この末期の言葉の意味は、上の語りから判断して、人間の孤独と精神的な弱さを示唆するであろう。後にマーロウは、コンゴからパリへ帰り、クルツが依頼した書類を許嫁に手渡す。彼女から彼の末期の言葉を尋ねられたとき、マーロウは“The last word he pronounced was — your name.”(79)とうその返事をする。その理由は、マーロウが事実を話せば、彼女が生きる力を失うかもしれないからであるし、彼自身が彼女を含めた人間の孤独と精神的な弱さをクルツから学んだからでもある。

コンラッドはイギリスの作家、批評家のEdward Garnett(1868–1937)に、“‘Before the Congo, I was just a mere animal.’”(qtd. in Sherry 63)と述べている。“just a mere animal”は、コンゴでの航海体験をする前の自分を語っている。したがって彼は、この航海体験で知った人間の本当の姿(孤独、精神的な弱さ)を*Heart of Darkness*で描いたと言えよう。

*Lord Jim*の主人公であるロード・ジムは、堂々たる体格をし、明晰な頭脳の持ち主で、首から靴まで白色づくめのりりしい服装である。⁵ こうした外見の勇姿とは逆に、“the fact”(4)⁶が明らかになる危険にさらされると、彼は沖手代の職(入港船の船長に船具を売り付ける仕事)を辞めて去ってしまう。「その事実」は、彼には“the Intolerable”(4)なのである。彼がついに行き着いた場所は、原始のジャングルの村である。そこでは、彼は住民から「トゥアン・ジム」(Tuan Jim)、英語で言えば、ロード・ジム(Lord Jim)と呼ばれる(4)。

そこで、「その事実」や「耐えられないもの」を探求するため、主人公の人生の展開に注目したい。海の生活を夢見るジムは、高級船員練習船で2年間の練習の後に航海に出て、数年後に一等航海士となって船に乗る。彼は、この船で嵐の日に倒れてきた円柱で足に負傷したが、なかなか治らないので、東洋のある港で下船して入院する。退院した後、帰国せずに船乗りの仕事を探したところ、彼は800人の巡礼団を乗せて出航する老朽船のパトナ(Patona)号の一等航海士として雇われる。船長は、イギリスのニュー・サウス・ウェイルズに住むドイツ人である。彼はあからさまに母国を非難したり、自分よりも弱い立場の者に暴力をふるったりする。機関長は、長年の親友である船長と共謀してお金の使い込みを行ってきている。二等機関士は、ロンドンのテムズ河畔にある船着場のウォッピング(Wapping)から来た知能の低い男である。補助機関係りは、無精ひげを生やし、蒼白くやつれている。船は最初、順調に進んでいたが、何かにぶつかる。

この件で、東洋のある港町の海難裁判所で審判が行われる。船が何かとぶつかったとき、ジムは、心臓のショックで死亡した補助機関係りを除いた三人(船長、機関長、二等機関士)と共にボートに移り移って漂

流していた。彼らは、通りすがりのエイヴォンデイル (Avondale) 号に救助され、寄港先のアデン (Aden) から上陸した。パトナ号は運よく沈没を免れ、フランスの砲艦に曳航され、巡礼者たちもジムと同じ港から上陸した。ところが、このパトナ号事件が港中でうわさされて、船長たちの卑劣な行動が問題となる。船長は、勝ち目がないと判断して逃亡する。アルコール中毒の機関長と、事件で腕を骨折した二等機関士は、病状を悪用して病院に逃げ込む。そこで、ジムだけが審判を受けることになる。陪審員からの質問に対して、彼は罪が軽くてすむように言い訳をせずに、事実を淡々と答える。

審判を傍聴していた人々の中に船長のマーロウ (Marlow) がいた。2日目の審判が終わって、彼と並んで歩く男がうろついていた犬につまずき、“Look at that wretched cur” (43) と言う。そのとき、ジムは自分に向けられた言葉だと勘違いして、マーロウに謝ろうとする。船長は “‘As far as I know, I haven't opened my lips in your hearing...’” (44) と返事する。審判所の外で言葉をかわしたのを契機に、二人は友人になる。船長は宿泊先のホテルで彼と食事をする。ジムは船長に、パトナ号事件でとった行動とその理由を話す。事故のとき、船は今にも沈没するかもしれないし、800人の巡礼団に対して7隻のボートしかなかった。どうしたらいいのか判断に迷っていると、彼は、船長、機関長、二等機関士が船から密かにボートを降ろして乗り込むのを目撃する。船長らは、補助機関係りがいないのに気づいて、“‘Jump, George! We'll catch you! Jump!’” (68) や “‘Geo-o-o-orge! Oh, jump!’” (68) と叫ぶ。その補助機関係りは、船の揺れによる心臓ショックで死んでいる。船が足下で真逆さまに沈んでいるように感じて、ジムはとっさにボートに向かって飛び降りる。そのときの心境について、彼は “‘There was no going back. It was as if I had jumped into a well — into an everlasting deep hole...’” (68) と語る。この内容は、一等航海士としての職責を放棄した彼の罪意識の深さを示唆する。この罪意識の深さに比べれば、彼はパトナ号事件での審判を気に留めない。この心境は、海難裁判所で彼が淡々とした語る態度に表れているし、同裁判所が下した海員免許の取り消しを素直に受け入れる態度にも表れている。こうしたジムの姿には、人生を前向きに考えることができないことから生じる孤独と精神的な弱さがあると言えよう。

判決後、マーロウはジムを友人のデンバー (Denver) が経営する精米所に世話する。友人は、ジムの勤勉な働きぶりに感心する手紙をマーロウに送る。ところが、ジムが短い詫言状を残して、精米所を去って行く。そのことを伝える友人の手紙がマーロウに届く。ジム本人から船長に送られてきた手紙が、彼の行動の真相を明らかにする。パトナ号の二等機関士であった男が、同じ精米所で臨時の機械係りに雇われる。彼は正式な機械係りになれるようにジムに近づく。彼の擦り寄った態度に我慢できず、ジムはこの仕事を去って行ったのである。

今度は、ジムは精米所から700マイル離れた港にあるエグストレーム・アンド・ブレイク (Egström & Blake) という船具の商会で働く。この商会でも評判がよかったが、彼は長く留まらなかった。この商会の客間に人々が集まり、パトナ号事件が話題になったとき、客の一人であるオブライエン (O'Brien) 船長が “‘what are you Injuns laughing at? It's no laughing matter. It's a disagree to human natur' — that's what it is. I would despise being seen in the same room with one of those men. Yes, sir!’” (117) とたしなめる。そばで会話を聞いていたジムは、エグストレームに理由を告げずに商会を去ってしまう。

パトナ号事件の判決後、ジムは同事件にかかわりのある人物や話題に遭遇すると、そのときの仕事をさっさと辞めてしまう。このような彼の行動は、同事件での背信行為に対する罪意識が強まり、それに伴い精神的に追い込まれていく逃避行を意味する。そこには、孤独と精神的な弱さに絶えず付きまといわれる彼の姿が認められよう。

後に、ジムは用船業とチーク材を商うユッカー兄弟商会 (Yucker Brothers) で仕事をする。彼の働きはこの商会でもよかった。ところが、自称シャム国海軍大尉のデンマーク人は、ビリヤードの勝負事で負けが込んでいたとき、そばに居合わせたジムに軽蔑するような言いがかりをする。そのためジムは、彼をメナム河へ投げ込む。デンマーク人はボートに乗っていた中国人に運よく救助されるが、この事件が周囲に知れ渡るようになる。その結果、ジムからこの事件を知ったマーロウは、彼を友人のデイ・ジョング (De Jongh) に委ねる。ジョングのもとでも、彼は沖手代の仕事を立派にやり遂げる。ある日、ジムは埠頭で、再会したマーロウに “‘this is killing work.’” (122) と述べる。この発言は、彼にとって、仕事が辛いのではなく、心の平安が得られないことを暗示する。

マーロウは、ジムの精神的な行き詰まりを南太平洋の島々で大規模な交易をする友人のシュタイン (Stein) に相談する。マーロウが友人に期待するのは、今ジムに求められるものを持っていると考えたからである。

それは聡明な判断と寛容の精神である。

シュタインはジムに、自らが経営する会社の出張所があるパトゥーサン (Patusan) で支配人としての仕事を世話する。パトゥーサンはオランダの保護下の土候国にある辺境の地域 (東南アジアの架空の地名) である。ジムは彼の世話を喜んで受け入れ、不退転の決意でこの地域に上陸するが、河を支配するラージャ・アラング (Rajah Allng) 一派の家来に捕まる。しかし、自力で脱出し、シュタインの旧友のドラミン (Doramin) 一派の配下に助けられる。ドラミンは住民に圧政的なラージャ・アラングと対立し、一人息子のデイン・ワリス (Dain Waris) がこの暴君をいつの日か倒すことを願っている。

両派を脅かす別の山賊集団がいる。それは、パトゥーサンの背後に陣を構えてこの地域を荒し回っているシェリフ・アリ (Sherif Ali) 一味である。一味へジムが主導する奇襲作戦は成功する。シェリフ・アリは敗北して、国外へ逃亡する。一味の敗北を知って、ラージャ・アラングは自分が次に攻撃されることを恐れる。しかしジムは、彼の生命も権威も保証して、この地域で尊敬と信頼を得る。

ジムの人生はやっと好転するかに見えた。ところが、彼の人生に立ちはだかる人物が現れる。その人物は、ブラウン (Brown) 船長である。彼は、フィリッピン島のミンダナオ島にある海港のサンボアンガ (Zamboanga) からスペインのスクーター船を盗み出すが、不足する食料を強奪するためパトゥーサンにやって来る。八方から攻撃を受け、彼は小さな入り江に逃げ込み、ジムのことを聞き及ぶ。彼の脳裏をかすめるのは、ジムと共謀してこの地域の住民に復讐することである。

小さな入り江を挟んで、ブラウンはジムと対峙する。白ずくめの服装をし、堂々たる態度を示すジムの姿を見て、ブラウンは彼との共謀を諦め、次のような言葉を投げかける。

“This is as good a jumping-off place for me as another. I am sick of my infernal luck. But it would be too easy. There are my men in the same boat — and, by God, I am not the sort to jump out of trouble and leave them in a d — d lurch” (233)

ブラウンの言葉は彼に、消し去ることができないこと (パトナ号事件での背信行為) を呼び起こさせる内容となっている。そのため、ジムは相手に、退去させるのか攻撃するのかを族長たちに相談することを約束して立ち去る。

族長たちとの会議で、ジムは “‘Let them go because this is best in my knowledge, which has never deceived you’” (239) と述べ、ブラウン一味の退去を認めるように主張する。シュタインから快く思われていないコルネリウス (Cornelius) が、退去の水路とその時間を書いた手紙をブラウンに渡す。ところがコルネリウスは、デイン・ワリスたちの陣地の背後ある別の水路をブラウンに教える。攻撃した住民たちへの復讐を諦めていないブラウンは、コルネリウスの案内でこの陣地を急襲して、デイン・ワリスたちを殺害して逃げ去る。

親友のデイン・ワリスの死を知り、ジムはドラミンの屋敷へ行く。ドラミンは息子のパトゥーサンの支配を願っていたばかりか、ジムの英知も信頼していた (*Lord Jim* 167)。そこでドラミンは、息子の死に関係する今回のジムの行動に激怒して、来訪者の胸板を拳銃で打ち抜く。

なぜジムは自ら死を選択したのであろうか。その点を考えてみたい。人生の再出発をするため、彼は決死の覚悟でパトゥーサンへ赴く。この地で英知を発揮して住民から尊敬され、彼の人生は切り開かれたかに見えた。しかし、その人生を一変させたのは、悪漢のブラウン船長の出現である。

パトナ号事件での背信行為を思い起こさせるような船長の言葉を聞いて、ジムはこの悪漢を逃亡させようとする。それは、同事件で犯したことへの罪意識から解き放たれるための行為である。しかし結果的に、彼の行為が父親から将来を期待されていたデイン・ワリスの死を招くこととなる。ジムの死の選択は、この罪意識ばかりではなく、絶えず付きまとう孤独と精神的な弱さも完全に払拭するための最終の決断である。

こうして、*Lord Jim* の冒頭で書かれていた語句が明らかになる。“the fact” はパトナ号事件で職務を放棄したジムの背信行為を示唆するし、“the Intolerable” はこの背信行為に対する彼の罪意識の重圧を示唆する。そこで、これらの語句の内容に深くかかわる孤独と精神的な弱さは、彼の言動の土台となっているのである。

おわりに

以上の論述から、本稿で検討した三つの代表的な小説 —*Almayer's Folly*, *Heart of Darkness*, *Lord Jim*— の主要な作中人物たち（オールメイヤー、クルツ、ジム）は、直面する生活環境の違いこそあれ、孤独と精神的な弱さが原因で悲劇的な死を迎える。彼らは、いわば人生の敗北者として描かれている。

では、なぜコンラッドはこのような人物描写をわれわれ読者に印象付けるのであろうか。その点を検討する上で注目されるのは、元々西洋人である主要な作中人物たちが未開社会に身を置いて、両方の社会の間で揺れ動く心理が強調されていることである。こうした強調はわれわれ（とりわけ、西洋人）に、安住する既成の現実社会のあり方を問いかけているように思われる。彼らの死の悲劇は、作者がわれわれにその現実社会を見つめ直して、精神的な再生を願っていることを示唆すると言えよう。

注

1. *Almayer's Folly* についての論述は、拙稿「*Almayer's Folly* における孤独な夢想家の主人公」を参考にしていることをお断りしたい。
2. *Almayer's Folly* からの引用はすべて *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River* による。括弧内の数字はこの著書の頁を表す。
3. *Heart of Darkness* についての論述は、拙稿「『闇の奥』と『地獄の黙示録』における人間の内面描写」を参考にしていることをお断りしたい。
4. *Heart of Darkness* からの引用はすべて Robert Kimbrough 編の *Heart of Darkness* による。括弧内の数字はこの著書の頁を表す。
5. *Lord Jim* についての論述は、拙稿「『ロード・ジム』の魅力」を参考にしていることをお断りしたい。
6. *Lord Jim* からの引用はすべて Thomas C. Moser 編の *Lord Jim* による。括弧内の数字はこの著書の頁を表す。

引用文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1960.
- Conrad, Joseph. *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River*. 1923. *Almayer's Folly: A Story of an Eastern River; and Tales of Unrest*. London: J. M. Dent, 1947. 1-208.
- . "Author's Note." 1923. *Almayer's Folly and Tales of Unrest*. vii-viii.
- . *Heart of Darkness*. 1963. Ed. Robert Kimbrough. 1963. New York: W. W. Norton, 1971. 3-79.
- . *Lord Jim: An Authoritative Text, Background and Sources, Essays in Criticism*. Ed. Thomas C. Moser. New York: W. W. Norton, 1968. 3-253.
- Gordon, John Dozier. *Joseph Conrad: The Making of a Novelist*. New York: Russell and Russell, 1963.
- Karl, Frederick, R. *Joseph Conrad: The Three Lives*. New York: Farrar, Staus and Giroux, 1979.
- Schwarz, Daniel R. "Acts of Initiation in *Almayer's Folly* and *An Outcast of the Island*." *Ariel* 8.4 (1977): 75-97.
- Sherry, Norman. *Conrad and His World*. London: Thames and Hudson, 1972.
- 古賀元章・山本一夫. 「『闇の奥』と『地獄の黙示録』における人間の内面描写」『福岡教育大学紀要』57号 1分冊 (2008): 33-39.
- . 「『ロード・ジム』の魅力—原作と映画の鑑賞—」『言語文化学会論集』31 (2008): 115-30.
- . 「*Almayer's Folly* における孤独な夢想家の主人公」『福岡教育大学紀要』61号 1分冊 (2012): 39-45.

